晨朝勤行（じんじょう）

真宗の風景

朝六時に梵鐘が響き、大門の環貫が抜かれます。午前七時に、お内陣の十枚のお扉が開かれ、輪燈に明かりが入り、燭台にお蝋燭が灯されます。お香が焚かれ、お仏飯が上卓に供えられます。

午前七時すぎ、朝の静寂を打ち破るかのように行事鐘が連打されます。いよいよ晨朝勤行の始まりです。そのころには近隣の方々が数名外陣に着座されています。行事鐘の最後三打をもって、内陣の鑿が二音、調声の「帰命無量寿如来　南無不可思議光」が発音されると正信偈の唱和が本堂に響き渡ります。

普段は草譜ですが、本願寺と本徳寺の歴代の命日には行譜でおつとめすることが慣例になっています。

正信偈と繰り読みの和讃が終わると、永代祠堂経を開闢された方に代わって仏説阿弥陀経一巻が上げられます。

本堂勤行の後、蓮如堂で讃仏偈をおつとめして、当日の和讃の内容説明とその法話が施されます。最後は、内道場で重誓偈をもって終わります。このようにして本徳寺の一日が始まります。毎日毎日、雨の日も風の日も、三六五日休むことなく勤められます。

正信偈・和讃の繰り読みは、蓮如上人によって始められた本願寺独特の作法です。親鸞聖人のお言葉を自ら発音し、この声を聞いて一字一句かみ締めることができます。何度聞いても新しい趣があります。ことに名号を称えさせていただくときの高揚感は文言で言い表すことが出来ません。

最後に、回向句を称えさせていただいき、今日一日娑婆世界で生きる自己の意味を新たにすることが出来ます。この一連の勤行に浄土真宗の聞法の一部始終が篭められていることにつくづく感心します。

土曜と日曜日には参集した方々と寺務所応接で茶話会が催され、雑事を交えて法談に花が咲きます。

蓮如上人は御文章のなかで門徒に「物言え物言え」と勧めておられます。また「もの言わぬは恐ろしきことなり」とまでおっしゃっておられます。

いただいた信心を披露することによって、人からいろいろ指摘されます。批判は大切なことです。時として誤解や自分の勝手な解釈に安住していることがよく有るからです。

法義談合して始めて人から教えられ、また人に伝えていく事の大切さを蓮如上人はよくよくご存じであったに違いありません。

毎日のお晨朝にはどなたでも参加できますので、気軽にお越し下さい。

（真宗文化研究室）

朝市の日のお晨朝　於蓮如堂